

三浦光彦先生のご逝去を悼む

群馬大学大学院医学系研究科応用生理学分野
鯉淵 典之

群馬大学名誉教授・三浦光彦先生におかれましては、2016年3月15日にご自宅で倒れられ、ご逝去されました。数年前に呼吸器系の疾患で手術をされ、その後、ご自宅で療養されておりましたが、急な呼吸不全を起こし、急逝されました。心より御冥福をお祈り申し上げます。

三浦先生は1984年～1987年、及び1996年～1999年の2期に渡り、日本生理学会の常任幹事を務められました。また、1984年には第61回日本生理学会大会を当番幹事として主催され、前橋にて開催されました。

三浦先生は1933年のお生まれで、1959年に千葉大学医学部を卒業されました。その後千葉大学大学院医学研究科（生理学専攻）にて学位を取得後、コーネル大学医学部神経科（D.J. Reis教授）留学、千葉大学生理学第二講座助教授を経て1974年に群馬大学医学部生理学第一講座に教授として着任されました。そして1999年3月までの25年間、2,000名を超える医学生を育て、大学院生や専攻生の研究指導をされました。私も三浦先生の薫陶を受けた学生の一人です。1979年に群馬大学に入学後、講義や実習ばかりではなく、（恐れを知らない学生でしたので）時々教授室にお伺いし、将来について相談しておりました。前橋の生理学会大会も裏方として参加させていただき、生理学を生業と決めました。興味が内分泌学だったので、大学院は別の講座に所属しましたが、私の学位審査委員を快諾してくださり、厳しくも熱心なご指導を受けました。大学院修了後も機会があるごとに声をかけてくださり、ご自分の愛弟子のように可愛がってくださいました。三浦先生の後任となることが決まった際には、東京のホテルで夕食を



共にし、二人でワインを一本空にしてしまいました。その時の嬉しそうな顔は忘れることができません。ご一緒したホテルはそれ以降、私の東京出張の際の定宿となっています。

三浦先生のご研究の中心は循環・呼吸調節中枢の神経回路網の解析でした。循環調節回路研究においては、当時としては画期的だった頸動脈神経の単一線維記録で、血圧変化に同期して発火する活動電位を同定しました。また、延髄孤束核の電気刺激により、循環・呼吸調節に関連する部位を血圧・心拍・吸息・呼息など機能別に分類し、脊髄までの神経路を同定しました。そして興奮性伝達物質がオピオイドペプチドおよびサブスタンスPで抑制性伝達物質がGABAやアドレナリンであることを報告しました。呼吸調節回路研究では、延髄腹側表面のニューロンにH⁺感受性があるこ

とを証明し、脊髄までの投射経路を明らかにしました。平成に入ってから、分子生物学的手技も積極的に導入し、H⁺感受性糖質トランスポーター (PAST-A) のクローニングに成功しました。この業績は2002年にJ. Neurosciに発表され、三浦先生が senior author となった最後の論文となりました。また私と三浦先生の最初で最後の共著論文となりました。

大変心残りなのは、私が教授に就任して以降、何度お誘いしても「迷惑はかけたくない、もう君の研究室なのだから」と教室へいらっしゃることなくご逝去されてしまったことです。先生が主宰されていた研究室がどのように発展したのか、ぜひご覧になっていただきたかったです。今後も先生のご遺志を継いで、研究・教育に邁進したいと思っております。